



コロナ禍でのWEB授業

2度目の緊急事態宣言下の2021年1月29日、東京学校支援機構および一般社団法人東京オンライン教育振興会の協力を得ての玉川小学校に向けたWEB授業の撮影風景
(於：郷土資料館集会室)

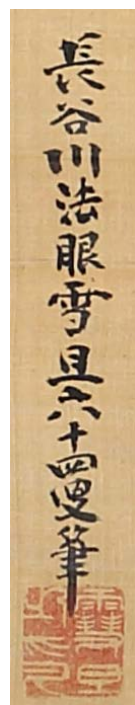
令和2年度は、新型コロナウイルスの影響を受け、当館でも様々な対応に迫られた。

4月1日～5月31日までの臨時休館、例年開催している各種講座や特別展の中止、社会科見学の取り止め、さらには恒例の「せたがやホテル祭りとサギ草市」「世田谷のボロ市」の中止など、今までに経験のないことの連続で、職員一同戸惑うばかりの日々だった。

その一方で、世の中はオンライン会議や授業など、インターネットを利用した非接触形の対策が広く行われるようになった。当館もそれに呼応する形で動画の配信、WEB授業や出張授業など、新たな挑戦が求められる一年となった。(詳細は14～15頁に掲載)

新収蔵品紹介

長谷川雪旦の二作品について



落款印章（双方）…「長谷川法眼雪旦六十四叟筆」印（白文方印「雪旦之印」）

写真1 「霊亀丹頂鶴図」対幅及び落款印章

制作年：天保12年（1841）

装丁：掛幅装（対幅）

材質技法：絹本墨画淡彩

法量（縦×横／cm）：

96.3 × 36.1 《鶴》

96.4 × 36.1 《霊亀》

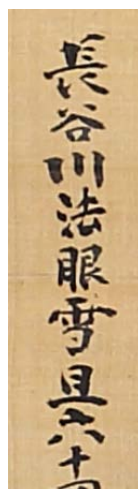
長谷川雪旦（はせがわ せったん／安永7・1778～天保14・1843）は、『江戸名所図会』の挿絵を担当した人物として、一般にも多少は知られている江戸時代後期の絵師である。陸奥棚倉藩（小笠原家）藩士・金沢某の子とされ、通称が長之助、名を宗秀という。画号に雪旦、巖（岩）岳斎、一陽菴などがある。『書畫薈粹二編』（安政6年・1859刊）には「江戸ノ人」とあることから、生まれは江戸であったと思われる。しかし、生い立ちや若い時分の動向は不明な点が多く、後藤姓を名乗った元彫刻大工とする異説もある。もっともこの点に関しては、雪旦十代の寛政年間に描かれた模本の中に「金沢宗秀」を明記するものが複数残されていることが重要であろう。それはともかく、若くして画業を志したようで、雪舟流の画系として知られ、長谷川等伯を祖とする長谷川派の画人・長谷川雪嶺（雪舟十三世を名乗った）に師事している。雪旦も二十代で長谷川姓を名乗っていることから、この年代には本格的な画業に入っていたと考えられる。ただ、画系にこだわらず、幅広い画風、画題をこなせたことが数多い遺作から明らかで、これは、様々な注文に応える力量を身に付けていたことを示している。特に写生と細密描写の力はかなりのレベルといえる。それがあつたればこそ、『江戸名所

図会』などの挿絵も担えたのであろう。とはいえ、こうした力量なるものは、江戸後期の市井画家に、ある程度なくてはならない資質と言ってよい。なにしろ、この時期の江戸市中には、有名無名の画人が数多活動していたことが諸文献や現存作品から判明している。そうした中であって、絵描きとして食べていくということは、肩書きなど権威の後ろ盾を得るか、抜きん出た技量や幅広い画技を身に付けることが否応なく必要となろう。優れた画技をものにしていて雪旦は、後年、昔からの機縁か、はたまた腕を見込まれたか、唐津藩小笠原家（先記陸奥棚倉藩小笠原家が転封で唐津へ）の御用絵師に抜擢されている。ついには、権威の後ろ盾さえ獲得したわけである。

ところで、これまで当資料館における美術工芸分野の作品・資料収集は、江戸時代の世田谷にゆかりある画人の作品を中核に据えており、『江戸名所図会』の挿絵制作にあたり世田谷にも足を運んだことが推測され、また、現在世田谷に墓（息子雪堤との合葬墓／北烏山・幸龍寺）がある雪旦も、そうした画人の一人として収集に努めているところである。雪旦は多作で知られているが、晩年期のものはこれまでさほど紹介されていないように思われる。特に「法眼」に昇叙したとされる天保10年以降の作例紹介は思いの外少ない。この度当館では、その晩年期に制作された作品を二点収蔵したことを報告しておきたいと思う。

写真1は、かれこれ一年程前に収蔵された雪旦64歳時の作品。それは、「霊亀丹頂鶴図」と箱書きされた対幅で、向かって右に丹頂鶴と松、左には霊亀と竹を配したオーソドックスな構図の作品である。「鶴は千年、亀は万年」の格言を引っ張り出すまでもなく、今日でも丹頂鶴・霊亀共に長寿を象徴する図柄としてつとに知られており、江戸時代にも盛んに描かれた。松竹も同様で、まさに目出度い尽くしの吉祥図である。この作品の来歴は明らかでないが、市井でも活躍していた雪旦のこと、比較的裕福な家の注文に応じて制作されたものかとも推測される。粉本に基づく定型化した構図とモチーフに、新味や面白さは感じられないが、手抜きのない丁寧な仕事ぶりが窺える生真面目な作品である。最晩年期ながら筆の運びは闊達で勢いも失われておらず、その出来映えに衰えは見受けられない。こうした吉祥画題の作品制作は、終生作画活動の中核であったと思われる。

写真2は、「春秋野趣」と箱書きがある対幅の作品で、ごく最近収蔵されたものである。署名に「法眼」とあることから、こちらも天保10年以降没年まで約5年の間の制作であることがわかる。向かって右に、初春の長閑な農家の様子や、春の田植え、また、小川での種籾浸し（浸種）の様子などが描かれ、左には、秋の収穫をメインとした農耕風景の描写が展開されている。一見見慣れた山水図のような構図だが、画面下部の前景から中景に描かれる情景は極めて現実的で、どこかの実景かとも推察される。おそらく本作も注文による制作なのであろう。そうであれば、そこに描かれる人々や家屋、農耕の様子は、注文主家の日々の生活が、かなり正確に描き込まれているのではないだろうか。農具や習俗などの特徴が、ひよっとすると地域の特定を可能とするかもしれない。ただ、まったく不自然さは感じないのだが、右幅に配された松と梅、さらに竹垣を加えて「松竹梅」となる点などを見ると、実景ではなく、吉祥の図柄をさりげなく添えた創作箇所が含まれている可能性も考えられる。というのも、こうした配置、構図の近似する作例が、粉本ではあるが他に存在するからである（「農家図」＝『江戸の絵師 雪旦・雪堤 その知られざる世界』所収）。いずれにせよ、これらの検討は今後の作業である。雪旦は、唐津藩の絵師であり、藩主のお供で江戸と唐津を往復してもいる。当然、唐津をはじめ江戸以西の各地に滞在していることから、本作に描かれる情景も、江戸やその近郊以外の地の、とある農家がモチーフとなっているのかもしれない。なお、雪旦には、相模国渡内村（現・神奈川県藤沢市）名主・福原家をメインに据える、実景をもとに制作された「四季耕作図屏風」（佐賀県立博物館蔵）という大作がある。これは、雪旦61歳（天保9年・1838）の時の制作であり、「春秋野趣図」とも近い時期が推測される点は留意される。屏風は、内容的に見て、当然福原家の依頼による制作と思われるが、こうした事例のあ



落款印章（双方）：「法眼雪旦 印」（白文長方印「岩岳齋」）

制作年：天保 10 ～ 14 年（1839 ～ 43）

装丁：掛幅装（対幅）

材質技法：絹本着色

法量（縦×横／cm）：84.2 × 27.5

《左右幅共》

写真 2 「春秋野趣図」対幅及び落款印章

ることをふまえば、春秋野趣図の場合も、似たような制作背景が十分考えられよう。実景をもとにした注文も、かなり多かったのではないだろうか。

以上、近年収蔵された長谷川雪旦の二作品について簡単に紹介した。先程も述べたように、詳細な検討はこれからであり、いずれその成果を盛り込んだ報告をおこなうつもりである。また、さほど遠くない時期に、ミニ展示などをつうじて、作品自体を鑑賞していただく機会を作りたいと考えている。この度紹介した二作品は、江戸後期に名をなした一老画家の、晩年の作画活動の一端を垣間見せる作品、と言ってよさそうである。江戸時代の長谷川派については、十分考証されているわけではなく、今後の詳細な研究が待たれる画系の一つである。とりわけ雪旦の師・雪嶺や、それ以前の動向に不明の点が多く、作品紹介も決して多いとは言えない。雪旦の研究もまだ尽くされたとは言い難く、これらの作品が多少ともその点で貢献できれば幸いと考えている。

（文責・学芸研究員 鈴木泉）

【参考文献】

中島理壽・森銑三編『近世人名録集成』（勉誠社、1976 ～ 78）

景山純夫「長谷川雪旦考」（『デアルテ』10、1994）

『江戸の絵師 雪旦・雪堤 その知られざる世界』（江戸東京博物館、1997）

『世田谷区立郷土資料館開館五十周年記念特別展 大館蔵品展』（世田谷区立郷土資料館、2014）

収蔵資料紹介

自動蠅捕器「ハイトリック」



写真1 ハイトリック

木製

寸法(縦×横×高/cm) 23.5×24.5×15



「ハイトリック」構造図

えいえい

宮々と蠅を捕りをり蠅捕器

これは、明治～昭和にかけて活躍した俳人・高浜虚子(1874～1959)が詠んだ句。ほかにも「蠅取器蠅しょうよう従容と吸はれゆく」(土山山不鳴)、「蠅取器音なく蠅を食べにけり」(栗生純夫)など、明治生まれの俳人によって蠅取器を題材とした句が数多詠まれている。

今回紹介する資料が、まさに「ハイトリック」という名の、生きたまま蠅を捕れる自動蠅取器である【写真1】。

この機械は、最初兵庫県¹の堀江松治郎氏が発明し、大正2年(1913)に特許(第23359号)を得た。その後、名古屋の尾張時計株式会社(現・尾張精機株式会社)が製造権を買い取り、これに改良を加え、大正4年(1915)に再び特許(第27748号)を得て製造・販売したものだ。当時名古屋は、東京と並んで時計製造の一大産地だったため、その機械技術が「ハイトリック」にも応用された。国内は勿論、中国、インド、東南アジアなど海外へも盛んに輸出された。

「ハイトリック」は大正初期から昭和20年代まで製造されたが、大正時代の価格で2円から7円と、当時としては高価な商品であったため、一般に普及するというよりは、中流以上の家庭で使われたようだ(ちなみに、大正9年の小学校教員の初任給は月額40円)。

「ハイトリック」の構造は上図に示す通りである。まず四角柱の回転板部分に醤油・味醂・砂糖水などの餌を塗って蠅をおびき寄せる。蠅が夢中で餌を舐めている間にゼンマイの力でゆっくりと回転板が回り、蠅は次第に奥へと運び込まれる。周りの暗さに驚いた蠅が光の差し込むガラス板に向かって飛んでいくと、知らぬ間に金網箱へと導かれ二度と外に出られない、というものだ。

捕まえた蠅は金網箱を本体からはずし、水につけるか、火であぶって処分した。

一方、明治から大正にかけてカジカ蛙を飼うのが流行っていた。カジカ蛙は生きた蠅やクモを餌としたため、毎日生餌を捕って食べさせなければならず、「ハイトリック」のような専用の蠅取器が使われた。カジカ蛙の鳴き声はコマドリに似た、キュロキュロキュロと低いけれども遠くまで聞こえる、何ともいえぬ涼しげな^ね音を出すことから、夏季には人々に珍重された。春彼岸から秋彼岸頃まで雄だけが鳴く。深い山の清流に生息し、よく鳴くものは1匹10円から50円もしたという。

さて、「ハイトリック」が販売された同時期、「村瀬式丸ロール捕器」（名古屋商事株式会社時計部）など、各地で類似品が製造された。当館にもその1つと思われる「河野式ハイトリキ さざなみ」【写真2】なる製品がある。これは、東京・駒込の河野清氏が発明し、大正8年（1919）に特許（第33730号）を得た「河野式畳込捕蝇装置」である。簾状の誘導帯①に餌を塗り、ゼンマイの力で簾が回転し、その先の金網箱に蝇が入っていく仕掛けになっている。誘導帯を畳み込めば全体の容積が小さくなり携帯に便利なのが特徴。

以上のように、現在ほど衛生環境が整備されていなかった当時、人々は様々な工夫を凝らして蝇と闘っていたことが窺える。冒頭の句を詠んだ虚子もまた、五月蝇く飛び回る蝇に悩まされていたのだろうか。



写真2 河野式ハイトリキ さざなみ
木製
寸法（縦×横×高/cm）32×20.7×15.6

【参考文献】

（文責・歴史専門調査員 小林信夫）

植木譚一編『名古屋実業界評判記』1915年／丘浅次郎講述『人類進化の研究』1915年／頼信蛙鳴『金になる野生動物捕獲実話物語』1917年／畠山久重『動物と人生』1918年、科外教育叢書42／名古屋商業会議所編『名古屋物産案内』1923年／秦和寿「時計装置捕蝇器ハイトリックの防虫具史的検討」2000年、『家屋害虫』Vol.22, No1／「蝇：575 筆まか勢」<https://fudemaka57.exblog.jp/22800341/>（参照 2021-3-17）

新収蔵品紹介

桜小学校旧蔵資料「昭和7年度学校日誌」

令和2年4月、区立桜小学校より学校所蔵資料の寄贈について相談があった。新型コロナ対策に伴う臨時休校期間中に、校内整理を行った中で発見されたものだという。これを受けて、文化財係と当館職員が資料の整理・確認作業を行った結果、青焼図面、古写真をはじめとして、保存環境に配慮する必要性の高い資料を中心に寄贈を受けることとなった。なお、学校内の展示などの機会に活用していると思われる資料の寄贈は受けず、学校へ返却した。

桜小学校は、明治12年（1879）に世田谷村内の円光院本堂を仮校舎として開校した、区内でも初期に開かれた学校である。今回寄贈を受けたのは、学校創立期の明治から昭和50年代にわたる学校関係資料計65件である。主な資料としては、写真資料（校舎・行事記念・校長肖像など）や卒業証書類、学校経営関係文書、研究授業用資料、学校沿革誌（記念誌）、終戦直後のGHQによる指令をまとめた冊子などが含まれる。学校記念誌などで既に紹介されている資料も多いが、『世田谷区史』や『世田谷区教育史』でも使われていなかった資料も散見された。

これから紹介する昭和7年度「学校日誌」も、教育史編纂事業の過程で収集されてはいたものの、本編の記述には反映されなかった資料である。「学校日誌」とは、その学校の様子を知ることができる基本的な史料のひとつで、寄贈資料中には昭和5～7年度の3か年度分が含まれていた。「日誌」には、日々

1 教育史編纂事業では、複写による資料収集が行われ、その資料は郷土資料館に移管されている。資料の散逸を防ぐためにも、原資料の所在確認調査を進めることが今後の課題であろう。

の学校行事、児童の出欠数、来校者、校長の訓話、教員の動向などが記されている。昭和7年度の日記は、満州事変から日中戦争、アジア太平洋戦争へと向かう時代に、児童たちが経験したことを伝えてくれる貴重な史料である。

桜小学校の春

4月1日、全校児童1150名余りで始業式・入学式の日を迎えた【写真1】。この日は晴天、温度は「60°」と華氏で表記されている。当時、桜小学校の正式名称は「櫻尋常高等小学校」といい、修業年限が6年間の尋常科と2年間の高等科で編成されていた。学級編成は、1年生のみ4学級、2～6年生は3学級である。各クラスの人数はばらつきがあるが、40～60名程度となっている。男女構成に注目すると、1年生のみ男女混合、2～6年生は、男女別が1学級ずつ、男女混合が1学級となっている。

写真1 学校日記 昭和7年4月1日

4月29日には、四大節のひとつである天長節の式典が行われた。第13代校長を務めた滝島兼吉（在職期間：大正11～昭和6年）の思い出話によると、「当時四大節と言って一月一日の四方拝、二月十一日の紀元節、四月二十九日の天長節、十一月三日の明治節が国民の祝日として休日となっていました。学校では職員児童は登校し、町長さんなど来賓の御列席を得て祝賀の儀式をあげたのです。その儀式の大意は、式場に御真影を奉掲申し上げ、御真影に対し奉り最敬礼、君が代の歌奉唱、教育勅語の奉読、訓話、祝辞、祝歌斉唱といとも厳粛荘重のうちに行われたのでした。」（『桜校沿革誌』創立90周年記念誌、40頁）とあるように、四大節は重要な学校行事であった。

学校行事と戦争の影

5月と11月は校外教授（遠足）や修学旅行の季節だった。この年の5月、尋常科1年生は向ヶ丘遊園地、2年生は明治神宮へ参拝に行っている。また、3、4年生は横浜、5、6年生は高尾山、高等科1、2年生は奥多摩へ出かけた。11月の校外教授では、多摩川や洗足、九品仏など近場に出かけている。校外教授の計画は「櫻尋常高等小学校規程」にも定められていたが【写真2】、その年によって行き先は異なったようである。この他、学校対抗の野球試合や夏休み明けの夏休児童成績展覧会、そして10月には秋季大運動会が行われている【写真3】。また、12月1日は開校記念日となっており展覧会が行われた。12月15日がボロ市のために休校となっているのは桜小学校の特徴だろう。

写真2 櫻尋常高等小学校規程
（大正12～昭和7年）

こうした学校行事に加えて、軍事色の強い行事も数多く見られる。5月27日の海軍記念日、3月10日の陸軍記念日には軍人による講演会が開かれている。また、満州事変一周年を迎えた9月19日には「満州ノ兵隊サンへ慰問品ヲオクル」とある。世田谷区内には多くの軍事施設があったが、桜小学校の立地上、陸軍自動車学校（桜丘1丁目）との関わりが深かったようである。昭和8年2月9日には「自動車隊出征兵士見送り」、3月8日に「自動車学校戦死者迎へ」、その翌日には全学年の級長が葬儀に参列している。また、陸軍自動車学校長から慰問品に対する礼状を受け取っている（2月6日）。その後、昭和16年には小学校は国民学校と改められ、戦時体制が強化されていくが、その前段階である昭和7年時点で、既に戦争は学校教育に暗い影を落としていたのである。

ラジオ体操とオリンピック

一学期の終業式は7月20日に行われ、夏休みに入った22日には朝6時からラジオ体操が行われている【写真4】。日本では、大正14年（1925）にラジオ放送が開始され、昭和3年（1928）に「国民保健体操」の名称でラジオ体操の放送が始まった。昭和6年には、夏期休暇中に東京市内や隣接町村の小学校校庭を会場として「ラジオ体操の会」が開催されるようになり、この動きは翌7年の夏には全国に広がった。桜小学校の昭和5～7年の日誌で「ラヂオ体操」の言葉が出てくるのも昭和7年が最初である。なお、「江木アナ」とは体操の号令をかけていた江木理一のこと、陸軍戸山学校の軍楽隊員だった。桜小のラジオ体操の会には一般人も多く参加し、盛況の内に8月1日、閉会となった。

夏休み中の学校は静かだった。8月4日の当直教員は「誰も見エナイ。何トナク淋シイ。昨夜怪談ノ活動（筆者注：活動写真。映画の旧称）ヲ見タセイカヨケイト淋シイ。」と記している。同じ日、学校は「号外」を受け取った。この時第10回オリンピック競技会（1932年ロサンゼルス大会、7月30日～8月14日）の真最中。棒高跳びで第2位に西田修平、第5位に望月倭夫が入賞したことを記録している。

大東京のなかの桜小学校

10月1日、桜小学校の属する荏原郡世田ヶ谷町は「大東京」の一員となった【写真5】。この日、世田ヶ谷町・駒沢町・松澤村・玉川村の4ヵ町村が合併して世田谷区となり、東京市へ編入された。東京市は隣接市郡を合併したことにより、35区からなる人口500万超の大東京となったのである。



写真3 昭和8年10月秋季大運動会

記 事	
行 事	朝6時のラジオ体操 江木アナのラヂオ 体操隊 一冊大衆
訓	ラジオ体操の会 自由で西に、空 アツタ
話	ラジオ体操の会 多山 サエノモア
収	

写真4 学校日誌

昭和7年7月22日

記 事	
行 事	東京オリンピック 記念品贈呈（観望）
訓	校長先生 大東京の会 大東京の会 大東京の会 大東京の会
話	行ヒハナ 校長先生 児童の会 児童の会 児童の会
收受物	児童の会 児童の会 児童の会 児童の会
殊 児 事 童 項 特	児童の会 児童の会 児童の会 児童の会
来 訪 者	大東京の会 大東京の会 大東京の会 大東京の会

写真5 学校日誌

昭和7年10月1日

学校では合併記念式典が行われ、全児童へ記念品が贈呈された。記念品は皇居や明治神宮などの写真入り葉であった【写真6】。日誌に記念品を見る時の注意として「宮城、明治神宮ヲ拝見スル時ハ会釈スベシ」とあるのが興味深い。また、校長先生からは、「大東京市民トシテノ覚悟」について、来賓の相伴氏からは「大東京市民トナツタ誇トヨロコビヲノベ、今後ノ我等ノ行ヒニツキテ」お話があった。写真6 東京市からの記念品 昭和7年10月前月の28日には、校長が5年生以上の児童に対して東京市歌の練習を急かしているの、この式典で歌われたのだろう。



写真6 東京市からの記念品 昭和7年10

世田谷尋常小学校開校と卒業式

三学期が始まった1月9日、全校児童数が大幅に減った【写真7】。もともと4学級あった1年生は半分の2学級に、3学級あった2年生から5年生は、それぞれ男女混合の学級がなくなっている。6年生と高等科には変化がない。校長先生の訓話は「世田谷校へオ出デニナル諸先生ノコト」と「世田（谷）校へユク生徒ノコト」であった。

大正12年（1923）の関東大震災以降、東京の復興に伴い、世田谷をはじめとする東京周辺の郡部では急激な人口増加が進み、学齢期の児童数も急増していた。このため、昭和初期には校舎の増築や小学校・分教場の新設が相次ぎ、世田谷小学校もそうした中で昭和8年1月に開校したのである。一部の生徒が世田谷小へと転校したことにより、千人を超えていた桜小の児童数は800人程度へと落ち着いた。6年生の学級に変化がなかったのは、卒業を目前にしての転校を避けるという配慮だったのだろうか。6年生の児童たちは、無事、桜小学校で3月25日の卒業式を迎えることができたのである【写真8】。

（写真6は購入資料、それ以外は全て桜小寄贈資料である）

（文責・学芸員 角和裕子）

【主要参考文献】

『世田谷区教育史』（世田谷区教育委員会・教育総務部教育総務課、1996年）

黒田勇『ラジオ体操の誕生』（青弓社、1999年）

地方史研究協議会編『学校資料の未来』（岩田書店、2019年）

大門正克『増補版 民衆の教育経験』（岩波書店、2019年）

		児		童			
		出	席	缺	席	入	退
		男	女	男	女	入	退
1	一ノ一	29	31	1	0	10	0
2	一ノ二	29	34	0	0	1	0
	一ノ三						
	一ノ四						
3	二ノ一	56		0			
4	二ノ二		51		0		
	二ノ三						
	二ノ四						
5	三ノ一	49		2			
6	三ノ二		55		1		
	三ノ三						
8	四ノ一	43		0			
8	四ノ二		49		0		
	四ノ三						
9	五ノ一	49		1			
10	五ノ二		51		0	1	
	五ノ三						
11	六ノ一	40		3			
12	六ノ二		46		3		
13	六ノ三	28	27	1	2		
14	六ノ四	40	34	1	0	1	
15	高	31	27	0	1		1
16	計	345	415	87	1	1	
	合計	372	415	87	1	1	
	校長	49	46				
	検印	71	87				

写真7 学校日誌 昭和8年1月9日



写真8 卒業写真
台紙に「昭和八年三月卒業生」と注記された写真

調査報告

久保稲荷の初午

はじめに

初午^{はつうま}とは2月最初の午の日に行われる稲荷のお祭のことをいう。和銅4年(711)2月、稲荷社の神が最初の午の日に稲荷山三ヶ峰に降り立ったことに由来する。稲荷社の祭神は^{うかのみたまのかみ}卯迦之御魂神とされるが、別名を^{みけつがみ}御食津神といい、それを「三狐神」と字を当てたことから狐が稲荷の使いとされるようになったという。一般的に初午の日には、狐の好物である油揚げやいなり寿司などをお供えする。また、稲荷社は農耕神とされ、近代まで農村であった世田谷にも各所で祀られていた。今回、梅丘にある久保稲荷の初午を調査する機会を頂いたので紹介する。

世田谷の初午

まず、『世田谷区民俗調査報告書』を元に、区内で行われてきた初午の内容について見てみよう。

通常は初午の日に行われるが、野菜の仲買人は荷がよく動くようにと願をかけて二の午に行くところもあった。また、職業が農家からサラリーマンに変わると初午の日では参加者の都合が合わないため、初午近くの日曜日に移して継続しているところもある。お祭を行う集団は講中やズシと呼ばれる相互扶助を行う地縁的な関係か一族(イッケ)で構成されることが多く、10軒〜20軒を一つの単位とした。いずれにしても参加するのは当主が中心である。そのうち4、5軒の家、もしくは宿となる家が当番となりお供え、ご馳走の準備をする。お供えは油揚げ、赤飯(小豆ご飯)、御神酒、メザシ、ご馳走は赤飯、煮しめなどであった。稲荷社の前に集まり参拝した後、宿の家でご馳走を食べ、夜通し遊んだり、博打をする講もあった。また、村の相談事を話し合う場でもあったようだ。

一方で、子ども達は大人とは別の行動をとった。お稲荷様を祀っている家において稲荷社の前に丸太や竹、箆を持ち寄り6畳ほどの小屋を立て、真ん中には炉を切って鍋をかけられるようにする。初午の前日(ヨミヤ)から泊まり、神酒銭をもらって歩きお菓子を買ったり、太鼓を叩いて遊んだりして過ごした。また、場所を提供した家は雑煮や汁粉を作り、子ども達にご馳走した。

これらは明治41年(1908)の神仏合祀令による合祀か、第二次世界大戦を機に行われなくなったところが多い。

久保稲荷について

久保は『新編武蔵国風土記稿』に世田ヶ谷村の小名として記載され、現在の梅丘2丁目21周辺にあたる。久保稲荷は、同書に「稲荷社 字久保ニアリ」と記載されており、『世田谷区神社台帳』によれば、明治18年(1885)7月の時点で、「祭神 倉稲魂命、本社 間口八尺・奥行九尺、什器 木鳥居 壱基・太鼓 壱個・幟 壱対、信徒戸数 貳十八戸」とあり、当時初午に使用する幟や太鼓が稲荷社にあったと思われる。これが同40年4月15日に隣の^{あざ}字竹の上北野神社へ合祀された。さらに、北野神社は2年後に郷社宇佐神社(世田谷八幡)に合祀されている。その後、久保稲荷の土地は明治42年(1909)9月に売却が許可され、実際に売買された。しかし、合祀の後、久保稲荷を信仰していた家の当主や、土地を購入した人までも流行病で倒れてしまった。そのためオガミヤさんに見てもらったところ、お稲荷様が元の場所に戻りたがっているということで、大正7年(1918)に土地を買い戻し、再びお稲荷様を祀ったという。



太鼓を先頭に歩く行列



玉串（榊）を納める講員

久保稲荷の初午

久保稲荷の初午について、2021年2月3日の内容と聞き取りから紹介しよう。

日程は前年の暮れに^{よりあい}寄合で決められる。元々2月の最初の午の日に行われていたが（節分より前に午の日が来るときは二の午）、平成3年（1991）以降は参加者の都合もあり毎年日曜日に行われるようになった。

近年の講中の範囲は久保のみで、宿は宇田川敏一家である。当日、朝9時に宇田川敏一家に集まり、納屋に置いてある飾り付けの道具などを持ちだし、お稲荷様の飾り付けを行う。現在鳥居にかけるしめ縄は購入したものだが、以前はお手製のしめ縄を^よ撫って飾っていた。

お供え物は講の奉納金で用意し、必要な物はお祭前に買出しに行く。祭壇に並ぶのは鏡餅、生米、赤飯、塩、燈明、油揚げ、山の物（以前は農家だったので大根や人参など畑で収穫したもの）と海の物（わかめ、するめなど）である。お供え物はお祭が終わった後、世田谷八幡の神主に全て渡し、八幡様に奉納するので直会のお膳に^{なおり}あがることはない。

10時からお祭が始まる。講員は宿の家に一旦戻り、太鼓を先頭に神主、講員の順に並び、太鼓を叩きながら久保稲荷に向かう。太鼓を持ち、叩くのは男の役目であるという。境内に到着すると、太鼓は鳥居をくぐり稲荷社の前に置かれる。神主が太鼓を叩き、神事が始まる。祝詞やお祓いを済ませると、参加者は玉串（榊）を奉納する。神主が再度太鼓を叩いて神事は終了する。その後、隣に祀られている庚申塔にも鏡餅を^{さかき}供え、全員で拜む。帰りも行きと同様に太鼓を先頭に宿まで歩き、これで全てのお祭が終了となる。本来であればこの後に宿で直会が開かれるが、講員の減少や中心となって動いていた宇田川敏敏さんが一昨年に亡くなってからは中止している。なお、昔は日曜日に初午が行われた際には、子どもも一緒に参加するとキャラメルやせんべい、駄菓子、みかんなどのおやつがもらえるので楽しみだったという。

行事の中心は男性だが、女性も料理の準備で大変忙しかった。前日に宿の家に女性5、6人が集まり天ぷらに使う野菜の下ごしらえをする。当日は宿に9時集合で、朝から天ぷらを揚げ、小松菜のお浸し、ほうれん草の胡麻和え、里芋や竹の子の煮物、こんにゃく炒め、なますなどを作った。汁はオスマシ（お吸い物）。宇田川敏一家が宿の時は土間のかまどで赤飯を炊いていた。料理の指示をするのは大抵年長者であった。座敷で待機をしている神主と男性陣が太鼓を担いで出発した後、女性がテーブル等を並べて直会の準備を始める。太鼓の音が近づいてくると行列の帰りに気づき、料理や御神酒をだして給仕にまわる。飲食をするのは、かつては男性陣だけだったが、平成に入ると女性の膳も用意されるようになり、給仕を終えると座敷に呼ばれて一緒にご馳走を食べることもあった。そのまま夕方ぐらいいまでお茶も含めておしゃべりが続く。大勢の講員が参加し、割烹着を着て働く女性の姿、活気のある光景はお祭を感じさせたという。当時、女性は忙しくて行列に参加できないため、早朝などに個人的にお稲荷様へお参りした。平成20年以降は天ぷらを揚げるのをやめ、

オードブルはスーパーに注文し、当日にお浸しや漬物を作るようになったため、女性の負担は減った。

『祭典覚帳』から見る行事の変化

講中では2冊の『祭典覚帳』に昭和8年(1933)から平成29年(2017)まで84年分の購入品及び費用、祭礼日、宿・当番の家、参加戸数(人数)、メモなどを記録していた。



『祭典覚帳』 昭和31年(1956)2月9日

この『祭典覚帳』を元に表を作成し、どのような変化が見られるか試みた。(右表参照)

まず、昭和初期はお供えや料理に関する品目が一番多く、あげ(油揚げ)・いか・えび・椎茸・人参・かんぴょう・蓮根・こんにゃく・生姜、調味料は砂糖・醤油・酢などが購入され、薪炭も欠かせないものであった。

第二次世界大戦も佳境に入ると、やはり食料不足となり昭和16年(1941)からは御神酒・白米・あげ・いかを除いて購入品は少なくなり、調味料を少々買う程度になる。同18年の「申合せ」には「爾今各祭典ハ継続ノコト。諸物資ハ担当部落ニテ出来得ルカギリ集メ若シ集メ得ラレザル時ハ各戸ヨリ出、欠席ノ別ナク米壹合五勺宛集メ野菜等ニテ準備ノコト」とあり、当時の食糧難の様子がわかる。同20年には醤油も「久保講中ニテ若干ツツ集メ」た程だった。

昭和25年(1950)には初めて肉(豚)が見え、同30年代にかけてちくわ、はんぺんなどの練り物が登場するようになった。昭和39年(1964)以降、これまで欠かすことのなかった白米の代わりにいなり寿司、その他につまみ・菓子など従来とは異なるものが購入され、直会の食卓にも変化が出てきたと思われる。

講員の参加戸数に注目してみよう。講中は久保と竹の上の2つの字から構成されており、昭和18年(1943)で最大26戸の参加があった。それからしばらくは23戸前後を維持していたが、昭和45年(1970)は17戸となり、その後は徐々に減少していく。その理由は引っ越しや当主が亡くなったことがきっかけで講のお付き合いをやめることが多かったようだ。

おわりに

この調査で印象に残ったことは、連絡をする中で度々出てきた「ムラの人達に聞いてみます。」という言葉だった。こちらからの質問や要望に対して、寄合で決定された答えが返ってきた。現在そのような関係性を維持している講中は少なくなってきたが、例えば人数が減ったとしても久保稻荷を中心とする共同体としての意識が垣間見えた瞬間であった。

最後に、この調査を御快諾・御協力いただいた宇田川家、久保講中の方々にこの場を借りて厚く御礼を申し上げる。

(文責・学芸員 松浦瑛士)

【参考文献】

吉川弘文館『日本民俗大辞典』1999

牧野眞一「関東の稲荷講と祭祀集団—その形態と変容—」(『講研究の可能性』所収)2013

凡例

- ・『祭典實帳』を元に昭和九（一九三四）～一九七〇までの祭礼日、購入品、金額、参加戸数を適宜抽出し、表を作成した。
- ・購入品の名称は現代仮名遣いに改めた。
- ・昭和三十七年（一九六二）は稲荷神社の新築御遷宮に付き、講中他有志の費用で初午を行ったと記載されているが、詳細は不明である。

[illegible]

学校連携事業

コロナ禍における新たな取り組み

新型コロナウイルスの感染拡大は、小学校の社会科見学にも大きな影響を及ぼしました。例年、郷土資料館では社会科見学を30校以上実施しています。しかし、今年度は5校のみで、予約があってもキャンセルが相次ぐ状況でした。そこで、当館ではコロナ禍でも世田谷の歴史や昔の暮らしを知ってもらえるよう、次の4つの取り組みを新たに実施しました。

(1) 密を避けた見学

通常、見学は1学年まとめて実施します。しかし、生徒数の多い学校では100人を超えるため、密を避けられません。そのため、1グループを30人前後とし、大場代官屋敷土間(建物・昔の道具の解説) 一代官屋敷表門(世田谷代官・ボロ市の解説) 一資料館展示室(自由見学)をグループ毎に順番で回ってもらうように変更しました。

この結果、昔の道具の解説時間は短くなりましたが、一方で内容を「食事」に絞り、土間にある竈を利用することで、より具体的な説明ができるようになりました。また、少人数になったことで、子どもたちとのコミュニケーションも格段に取りやすくなりました。

(2) 動画配信

社会科見学ができない状況では、昔の道具について知る機会ほとんどありません。そこで、来館せずとも学べるよう、昔の道具の解説・実演を動画にし、《せたがや まなびチャンネル》に掲載することにしました。

動画は「洗濯」「アイロン」「ご飯を炊く」「食事」の4本で、見学時と同様の内容としました。制作に当たり最も注意したことは配信時間です。閲覧対象が小学生ということもあり、集中力が続くよう短時間で収めました。また、火のついた炭を使う、ムクロジの実から洗濯用洗剤をつくるなど、通常の見学時では困難なことも動画内では実演し、映像から当時の使い方が分かるよう心掛けました。

動画制作は初めての試みであり、機材や撮影方法など分からないことだらけのスタートで、特に編集作業には膨大な時間を要しました。簡単にはいきませんが、今後も動画制作を継続しつつ、授業などで活用いただけるよう普及も進めていきます。(※動画「ご飯を炊く」は今後制作の予定)



火熨斗の実演(動画)



洗濯板の実演(動画)

(3) 出張授業

社会科見学が困難なことから、今年度より出張授業を開始しました。授業内容は相談の上決定しますが、「世田谷の土地利用」「交通」といった副読本に沿ったものを希望する学校が多くなっています。難しい内容では

ありますが、「地域の話」「昔と現在が比較できる写真」「昔の道具の体験」を盛り込み、子どもたちの関心を
得られるよう努めています。

特に子どもたちの笑顔が見られるのは、昔の道具体験と下肥^{しもごえ}について話す時です。下肥は畑で野菜を栽培
する際に肥料として用いた人糞尿のことで、「うんち」の単語が出た途端、それまでの解説が吹き飛ばほどの
盛り上がりを見せます。体験では下肥を入れていた肥桶を持ってもらうのですが、時間の関係上少人数しかで
きません。今後は時間配分を改め、体験を増やしていくことも検討しています。



桜丘小学校での出張授業



駒繫小学校での出張授業

(4) WEB 授業

東京学校支援機構および一般社団法人東京オンライン教育振興会の協力を得て、玉川小学校との WEB 授
業を行いました。内容は「世田谷の人口増加と土地利用、交通、公共施設」についてで、昭和 20 年代の中
町周辺の写真や地図を使って解説しました。特に双方向性を重視してほしいとの要望があったことから、質問
を多く採り入れ、子どもたちと会話をしながら進めていきました。

授業はカメラ4台で撮影し、見せたいものによってカメラを切り替えました。また、板書の時間を節約するた
め、箇条書きにした文章や質問を事前に印刷し、場面に応じて貼り替える方法をとりました。結果として、学
校側からは解説者の動き・表情がよく見えたこともあり、会話が弾み、子どもたちも積極的に授業に参加して
くれました。



WEB 授業の様子

この他、夏休みのミニ展示を平成 29 年度より開催してい
ます。この展示シリーズは子ども向けに、昔の世田谷の生活、
風景、時代の移り変わりを解説したもので、今年度は次大夫
堀公園民家園と同時開催で「夏の暮らし」について展示しまし
た。今後も状況に応じて対策を検討し、学校連携の充実に努
めていきます。

(文責・学芸研究員 松本知佳)



夏休みミニ展示 展示風景

令和二年度 主要事業報告

季節展・ミニ展示

ミニ展示「切り絵の世界ー並木のある風景ー」 ①

6月20日(土)～7月26日(日)

昭和59年～62年にかけて、後藤伸行氏が制作した「せたがや百景」切り絵の中から桜やいちよう並木など10点程を展示。

夏休みミニ展示「すこし昔の夏のくらしー涼をとる」

8月1日(土)～9月27日(日)

エアコンが使われるようになった昭和40年代以前は、どのようにして涼をとる工夫をしていたのか。昔の道具を展示してその様子を紹介。

ミニ展示「川辺に遊ぶー近代世田谷の行楽地ー」 ②

10月24日(土)～12月6日(日)

近代以降、鉄道の敷設により行楽地として発展を遂げた二子玉川とその周辺地域の、明治から昭和初期の様相を紹介。

季節展「ボロ市の歴史」

12月12日(土)～1月17日(日)

美術ミニ展示

「世田谷ゆかりの近世画人3ー相澤五流と坂本浩雪」 ③

12月12日(土)～1月17日(日)

多摩郡関戸村名主・相澤五流と摂津高槻藩侍医で本草学や物産学にも精通した学者・坂本浩雪を紹介。

2021 世田谷区遺跡発掘調査速報展

～発掘された瀬田遺跡のムラ～

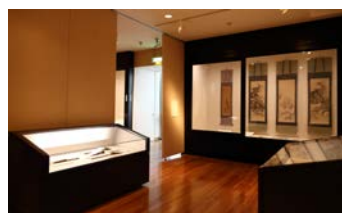
3年3月27日(土)～5月30日(日)



①



②



③



④

野外歴史教室

吉良氏ゆかりの地めぐり～世田谷地域 ④

11月10日(火) 講師：鈴木泉(当館学芸研究員)

参加人数：18人

《新収集資料》

○寄贈資料

三井牧場牛乳瓶ほか143点、庚申塔ほか4点、蕨葺保険広告ほか2点、二子玉川園入園券ほか3点、関東震災画報ほか6点、世田谷郵便局旧局舎カラーポジフィルムほか43件、玉川月廻家焼き鏝1点、高田竹山作 篆書「教育勅語」ほか73件、黒電話ほか20件、大正三年家庭日記ほか78件、桜小学校学校日誌ほか65件、第10回多摩川サケ放流式写真ほか287点、御香典帳ほか15件

○寄託資料

董其昌臨書 米芾「天馬賦」屏風ほか2件、扁額五言絶句「閑」ほか27件、相澤五流筆「駒競図屏風」(六曲一隻)

○購入品

涅槃図(江戸時代)、十六羅漢図(江戸時代)、霊亀丹頂鶴図(天保12年頃)、春秋野趣図(天保10～14年)、東京近郊日がへりの行楽(昭和8年)、市郡合併記念写真入栞(昭和7年)

資料館だより

No.73

発行年月日

令和3年3月31日

編集発行

世田谷区立郷土資料館

〒154-0017

世田谷区世田谷1-29-18

☎ 03-3429-4237

FAX 03-3429-4925

広報印刷物登録番号 No.1941